

---

# ゴッドインメモリーズ2

卯月昇華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴッドインメモリーズ2

### 【Nコード】

N7439X

### 【作者名】

卯月昇華

### 【あらすじ】

ソニヤが行方を眩ませて十年の月日が流れた。シズクとサマエルは、十年もの間ずっとソニヤを探して旅をしていた。ある日、二人は少年ノアと出会い共に旅をすることになる。やがて、運命は何かを求めようにもまた歯車を動き出す。シズクとサマエルは、ソニヤに会うことが叶うのか？ノアの背負う運命は、彼に何をもたらすのか？

## 序章

「あんだ、大陸さ渡ってどうする気だ？」

この道のベテランだと自負する船頭は、穏やかな海の心地良さに負けないくらい優しい声で、船尾の青年に話し掛けた。

「……………」

青年は答えなかったが、船頭はそんな気がしていたのか、

「ま、大陸さは夢があっからな。若い時は誰もが一度は夢に惹かれるもんだべ」

構わず続けた。

青年は、全身を覆う麻色のマントに身を包み、頭から鼻先まではフードで隠れて顔が見えない。

大陸へ渡りたい。青年はそう声を掛けて来た。本来なら、定期便で行き来するものだ。とてもじゃないが、大陸を渡るような船ではない。が、顔を隠していること、チラチラと剣が見えること、何より危険を承知でちんけな船を選んだこと、訳ありなのだろうと悟って承諾したのだ。

幸い、今日は海もおとなしく、大陸へは時間をかければ行けなくもない。多分、それが出来る船頭は自分しかいない。青年も、情報をどこから手に入れやって来たのだろうか。

「んだけども、大陸さ渡つたら気をつけるだよ。バジリア帝国以外にも国が出来たと聞いただ。領土を巡って戦争してる国もあるみたいだべ。巻き込まれなさんな」

「……………知ってるよ」

「知ってて行くのかえ？ほんならええが、ま、夢が叶えばいいがのう」

氷の上を滑るように実にスムーズに海上を行くと、山肌が黒く見える島があつた。

「あれさわかるけ？もう十年になるかの。あそこさ村があつただよ。んだけんじよ、大きな火事に見舞われたとかで、みくんな死んじまつた。一人残らずのう」

船頭が独り言を言ってるうちに、やがて人気の無い砂浜へと到着した。

「さて、町から遠いけんじよ、ここいらでええかの？帰りのこと考えるとここが限界じゃね」

浅瀬に降り、船頭は船を波打ち際まで手押しした。

青年は水に浸かるまいとしたのか、その場で立ち上がり砂浜までジャンプした。

「ほえ、あんた身軽じゃのお。おどねーたわ」

「助かった。これは礼だ」

マントの中から巾着を取り、船頭に渡した。

ズシツと重みのある巾着を開け、手のひらに出してみると、銅貨だと思っていたが全て金貨だった。

「こ、こんなに受けとれねーだよ！こだな大金……………」

「いいんだ。危険な思いをさせたんだ、それくらい当然だ」

「い、いいのかえ？」

「ああ。気をつけて帰ってくれ」

青年はそれだけ言うと、背を翻した。

「あんたも気をつけてな。夢、叶うといいなあ」

孫を送り出すような気持ちだった。年老いた自分には人生最後の大仕事になるだろう。そう思うと、達成感が溢れる。

「違うんだ」

「ほえ？」

「夢を叶えに来たわけじゃない」

「ほんなら、なして定期便避けてまで大陸渡って来ただ？」

訳ありなのは訳ありに違いないだろうが、定期便を避けなければならぬほどのお尋ね者なら、どこもかしこも警戒態勢のはず。しかし、そんな気配は港にも何処にもなかった。

剣を持つてる辺りから、どこぞの国に仕官でもするのかと思っていたが……………違うらしい。

「人を探してるんだ」

青年は船頭に背を向けたまま言った。

「人探し？恋人かなんかかい」

「……………友人をね」

「友達かえ」

「そうだ」

「そうかい。見つかるかええのお」

「ありがとう」

再び青年は歩き出す。その後ろ姿さえマントで覆われよく見えないが、紅い鞘に収まった剣が青年の右腰にあったことだけは記憶に残っていた。

鮮烈なほどの紅の<sup>あか</sup>。

「ありやく、左利きじゃの」

それと、青年の背中が、何故かとても頼もしく思えたことも。

## 第一章 予言者と用心棒

ここ十年の間に、実に五つの国が新たに誕生し、世界は元より世界を治めていたバジリア帝国を加えると六つの国になっていた。

しかし、国としての機能を失っていたバジリア帝国に世界を統治する力はなく、各地で国が出来たというわけだ。

人の知恵と力は、十年で造り上げた国とは思えないほど完璧に近く仕上げていた。

そのひとつがザバス国。

「陛下、謁見を求めてる者がいるのですが……………」

とは言え、完璧に近いのは城や町の外観。町は元々あったいくつかが合併したもので、住民性の違いから問題は色々ある。

社会としての機能は完璧とは言えないのが実情だ。

もっとも、どんなに文明が進もうと、国が栄えれば栄えるほど問題は山積みだ。それを考えれば、完璧と言える社会は問題の数と質に比例するのかもしれないが。

「余に会いたいと？誰だ？」

口髭と顎髭を生やしたザバス国王は、五十歳という年齢ながらも、若々しい印象を受ける。

「それが……………若い女の予言者とその用心棒の男でして」

「予言者？」

「遅いわね！いつまで待たせるのかしら！」

黒いマントとターバンに身を包んだ若い女は、謁見を申し出てまだ数分だと言うのに苛立って見せた。

産声を上げて間もない国とは言え、ザバス国は既に六年経っている。こういう雑用くらいは、スムーズに流れて然りじゃないか。そう思っ止まない。

「風体の怪しい者が表れて、いきなり国王に会わせると言ったところですんなり会わせるわけないだろ」

門の前を右に左に右往左往する女を尻目に、“用心棒”は常識を語った。

「そんなこと、あんたに言われなくても分かってる！」

こうなると何を言っても無駄。

後は放っておくのが正しい選択だろう。

「それにしても遅いわね！」

これから国王に謁見しようとしている態度には見えなかった。

そこへ、門番が駆け寄って来て、

「おい、お前ら！陛下がお会いになるそうだ」

胡散臭い者との謁見が不可解に思えるのか、門番は納得いかないと言いたげな顔をしている。

「ホント!? サマエル!」

用心棒に嬉しさを伝えようとしたのだが、一人颯爽と城へ歩いていった。

「何をしてる? 早く行くぞ」

そう言っつて、止めた歩みをまた進めた。

「ちょ……………なんなの!? 勝手なんだから!!」

門番にまで置いて行かれた予言者は、

「待ってよ〜!」

慌ててその後を追うのだった。

## 第二章 目的

謁見を申し出てたのは一か八かだ。拒否されることを覚悟していただだけに、許されたのはラッキーだったとしか言い様がなく、待たされた甲斐があったというものだ。

「私は予言者のシズク。彼は用心棒として雇ったサマエルと申します」

お目通り叶い、早速、自己紹介をした。

ザバス国王は、二人を交互に見定めては、眉をひそめて見せた。

「ふむ。して、余に会いたかった理由を聞かせてもらおうか」

予言者と自称しながらも、なんと言おうか、誰もがイメージするよくな神秘的だとか妖しげな雰囲気はない。政治的な悩みの相談でも思っていたのだが、如何せん若すぎる気がして謁見を後悔していた。

そんなシズクがターバンを外すと、長い髪がストンと重力に従い落下した。

健康的な可愛さを持ち合わせてはいるが、それがザバス国王の後悔を重くするのだった。

「はい。実は、これから陛下を狙う者が現れます」

「……………ほう。それは余が殺されると言いたいのか？」

「そういうことになります」

「そうか。気をつけよう。ではご苦労だった」

「え？い、いや、あの……………」

話は終わってないのだが、ザバス国王は玉座から立ち上がりどこかへ行くこととした。

これには思わずサマエルもニヤリとせざるを得なかった。分かってているのだ。予言者と言いながらも、あまりにその雰囲気が無さ故に相手にされていないと。

まして、国としての歴史は皆無に近く、王の座を狙う者など居て当然。どうせなら、もっと具体的に言うべきなのだ。

無論、そのアドバイスをしようと思えば、シズクに説くことは出来た。が、用心棒として雇われているのだから、余計な仕事はする気はない。

「まだ何かあるのか？」

「あ……………命の危険なんですよ？これは嘘でもなんでもなくてですね……………」

「シズクと申したな？よいか、かつて世界はバジリア帝国によって統治されていた。それが十年前、どういっわけか急激に国としての機能を果たさなくなり、世界は乱れかけた。そんな中、世界を我が物にしようとする者、平和に治めようとする者、そういう者達がたくさんいた。そして、志を共にする者達が集まり、やがて国を造った。今、世界にはいくつかの国がある。広大な世界の陸地を求め、それぞれが動いている。あわよくば、他国を潰してしまおうとな。すなわち、命を狙われていることなど、自覚しておる。今日であるとう明日であるうとな。予言者が謁見などと言うから会ってみれば

……立ち去るがよい。余は忙しいのだ」

ぐうの音も出ないとはこのことだ。

歴史浅い国だろうと、国王は国王。世界の状況を把握している。

流石のシズクも、打つ手を失い一気に老けたように見える。

「お待ち下さい」

と、サマエルがザバス国王を呼び止めた。

「しつこいぞ」

機嫌を損ねたらしく、顔の神経が強張って見えた。

シズクも、何を言い出すのかとドキドキしてきた。

十年……ソニヤが自分達の前から消えてからずっとサマエルといたが、未だに何を考えてるか分からない男だ。このタイミングで下手なことを言ったら、ただでは済まない。そう思った矢先、

「陛下、陛下は狙われていることに慣れておられるようですが、それはあくまで“人”による魔の手だけに限られるではありませんか？」

驚いた。サマエルが敬語を話している光景が、シズクには天地がひっくり返るほどに奇跡だ。

「どついう意味だ？余を狙っているのが人間ではないと申すのか？」

「その可能性があると申しているに過ぎません」

見るからに腕の立ちそうなサマエルを、ザバス国王はまじまじと見つめる。

決して人相が良いとは言えないが、どこか有無を言わさない気配がある。

それは、サマエルが幾多の修羅場を経験して来た証。デッドラインを知っているということだ。

ザバス国王はサマエルに、

「……………面白い話だ。人間以外の者に狙われているとはな。お前サマエルとか申したな。随分大きい剣を携えているが、腕に自信はあるのか？」

そう尋ねた。あると言つのなら、その強さを見てみたい。ないと言つのなら、この場から立ち去ってもらうだけ。

「お試しになりますか？」

「フフフ。そう言つと思つていた。よかろう。我が兵士の指揮官と手合わせするがよい」

それは条件を提示されたと言つこと。シズクは確かめるように、

「勝てば私達を一晚ここへ置いて頂けますか！？」

身を乗り出した。

「余を狙つ人成らざる者とやらが目的か？」

「話が早くて助かります！」

「無論、サマエルが勝てば一晩だけ城においてやろう」

「やったあ!!」

と、思わず手を叩いてしまった。

「ただし、うちの指揮官は強いなんてものではないぞ」

自信があるのか、ザバス国王は笑みを溢し、

「誰か！指揮官を呼べ！」

声高に叫ぶのであった。

### 第三章 魔手

兵士の訓練場に通されたシズクとサマエルは、ザバス国王が自慢したがるほどの指揮官を待っていた。

「この国は、人を待たせるのが流行りなわけ？」

予想通りの不満をシズクが漏らしても、サマエルは何も言わない。

「にしてもさあ、あんた敬語なんて使えたんだ。ビックリよ。十年付き合ってたて初めてだもの」

「……………」

「それだけじゃないわ。慣れた感じだったわ。そう、ただ単に敬語を話したってのとは違ってた」

サマエル曰く、打算出来ないくらいの永い時間を生きているらしいから、過去にそう言う生活をしていてもおかしくはないが、アウトローの塊な彼からは想像するのに苦労する。

十年。その長い年月を持ってしても、サマエルという男は謎。ニヒルを崩したところさえ見たことがない。

サマエルからすれば、全く余計なお世話。迷惑だ。

そんなことさえ顔にしないのだから、シズクには到底分かり得ない未知の世界なのだろう。

ミステリアスな男は、女性を虜にすると言うが、どうにもサマエルはその類いとは別物のようだ。

「過去に王宮に仕えてたことあるんじゃない？」

どちらかと言えば新種の生き物だろうか。矢継ぎ早にシズクが質問責めにするのは、そんな目線だからかもしれない。

「ねえ、聞いてんの？」

待ち時間をサマエルで埋めようと思っているのだが、

「うるさい女だ。あのまま終わるよりよかろう。浅知恵しか働かんお前に代わって知恵を働かせただけだ。少しは感謝したらどうだ」

「な……………」

なんて言い草だ。まともに口を開けば皮肉ばかり。

当然、待たされてサマエルも苛立っている。やっと見せた感情が怒りかよと、シズクは頬を膨らませ目を三角にしてみせた。

「あつたまきた！なんなのかしら、その態度！！」

人目も憚らずぶちギレたシズクを、周りで二人を監視していた兵士達が驚いている。

それでもサマエルは、また普段通り沈黙した。

そして、ちょうどよくザバス国王を筆頭に訓練場の入り口から、“それらしき”人物がやってきた。数人の部下を引き連れて。

「待たせたな」

ザバス国王が言うと、シズクは慌てて愛想笑いを作り上げ、

「とんでもございません！」

予言者の演技に戻った。

「サマエル、紹介しよう。我が国最強の戦士、シグナスだ」

ザバス国王の紹介を受けると、シグナスはサマエルに歩み寄り手を差し出した。が、サマエルが応じる意志がないと知ると、すぐに引つ込めた。

「なるほど。陛下のおっしゃる通り見るからに強そうだ」

そして、隣のシズクを見て、

「予言者にしておくには勿体ない美貌だ」

シグナスは肩まである髪を掻き上げた。

無精髭を生やしてはいるが、よく見れば中々のハンサムな顔立ちをしていて、どこかクダイを思い出させる雰囲気、シズクは好きになれそうにはないなと内心思った。

「あ、ありがとうございます」

とりあえずは愛想笑いを続けてみるしかない。

「さて……………」

そう切り出し、シグナスはサマエルを見た。

「なんでも陛下のお命を狙う輩を退治したいそうだな？」

少し、どこことなく敵意を感じるのは、シグナスがサマエルとシズクに不信感を持っているからだろう。

「生憎だが、陛下の護衛は我らの仕事。君ら一般人が口を出すことではない」

ああ、やっぱりクダイに似ていけ好かない。

「そもそも、素性の知れない君らこそ陛下を狙う者かもしれないじゃないか」

「……………」

「ま、陛下も幾ばくか君らに興味があるようだし、一回きりの勝負だ。己の無能さを知るといい」

「フン……………よく喋る奴だ」

「な、なんだと!?!」

「腕に自信があるのなら、さっさとかかって来い。暇じゃないんだ」わざと怒らせようなどの意図は無い。それはシズクも理解しているが、思わぬ“返し”を喰らい歯を食い縛ったシグナスを見てせいせいいした。

同時に、サマエルの強さを知らないシグナスの自信が、崩れるだろうと先未来に同情してやるうと思った。

「無礼な奴め！腕試しとは言え、うっかり腕の一本でも落とさないように気をつけるんだな！」

シグナスは、勝負開始の合図を待たずして剣を抜いた。

「やっとザバスに着いたあ」

強い日射しに邪魔されながらの一人旅は、少年にはキツイものだった。

安く買ったレザーの胸当てと短剣だけが頼りの旅は、心臓に悪いこともよくあることだ。

それでも、少年にとっては代わりの無い御守りと言え、片時も手離すことはない。

出来たばかりの国にしては、意外にも人々が居着いていて、活気もある。

少年の名前はノア。十代半ばの端正な顔立ちをしたノアは、巾着を開け小さな銀貨が二枚落ちて来たのを確認すると、

「こりゃあ、明日まで飯はお預けかな」

目先の空腹を我慢しなければならぬ自分の立場に溜め息を吐いた。

ノアには目的があった。それさえ果たせば、当面の生活に困ることはなくなる。銀貨二枚ではパン一口分にしかない。バジリア帝国が世界を統治してる時は、銀貨二枚でパン一斤買ったが、今は世界に国が六つある。ひとつはバジリア帝国だが、他の五つは出来たばかりの国。貨幣価値も国の発展状況で左右されてしまう。

このザバスは、目覚ましい発展を遂げて来た国だけに、生

活水準が高い。銀貨二枚など、子供の小遣いにしかないのだ。

事前に学んだ知識が役に立って良かったと、そう思うのと一緒は何のために世界情勢とやらを学んでまで旅をしているのか、思い起こし瞳を閉じ噛み締める。

「見てろ！オイラが世界を変える！」

開いた瞳の中に、強い信念が灯をともしていた。

## 第四章 フレイズ

無情。

シグナスは決して実力が無いわけではないのだが、今回はかりは相手が悪かった。人間の常識など浅知恵の如く消しさるような力の持ち主が相手では、実際のところ打つ手は無い。

どこの馬の骨とも知らぬ怪しげな輩の強さは、シグナスには計り知れないものだった。

しかも、剣を使わずして勝たせてしまったのだ。おまけに何が起きたのかさえ分からないままに弾き飛ばされ、壁に背を打ち付ける不始末。

そして今、シグナスの右腕には、サマエルの愛剣カオスブレードが突き付けられている。

「クク………気をつけるんだな。腕試しとは言え、うっかり腕の一本も落としかねんぞ」

サマエルの皮肉たっぷり勝利宣言を放ち、カオスブレードを鞘に収めることで幕を閉めた。

「夢でも見てるのか………？ 全く攻撃が見えなかった………」

シグナスは、驚愕しながら部下に支えられて立つのがやっと。

文句を言える者はザバス側にはおらず、勝負を提案したザバス国王だけは、サマエルの想像以上の実力に感嘆といていた。

そして、ただ一人、シズクだけはにやけ顔で自慢気にしていた。

「流石ね、サマエル。ま、こうなることは分かってたけど。よくや

「たわ」

と、まるで表面上の用心棒とその依頼主という主従関係が成立しているかのように言った。

「フン。くだらん茶番劇だ。人間という生き物は、気配で相手の実力を推し量ることが苦手なようだから、こうでもしなければ納得せんだろう」

「あんだ人間じゃないの？」

「……………」

サマエルの沈黙を、シズクがどう捉えたか定かではないが、

「まいつか。人間離れしてるのは違いはないし。色んな意味で。それに、遠くの時空間から来たとか言ってたもんね」

古い話を思い出して言った。

その話がサマエルにとって都合が悪いのかはさておき、ザバス国王が二人のもとへやって来て、

「見事だ。シグナスはあれでもかなりの剣の使い手だ。ああも簡単に負けるとは思わなかった」

サマエルを称賛した。

「では陛下、約束通り今夜の護衛は私達にお任せ下さいね！」

予言者の雰囲気醸し出すのをさっさと忘れたシズクが、茶目っ気

たつぷりに言つと、ザバス国王は潔く承諾した。

そんなシズクを見て、サマエルは一息だけ溜め息を吐いた。要領よく物事を進めることなど、元々シズクには荷が重いのだ。何かやることへの意欲は買うのだが、待つという行為全般に拒絶反応を示すものだから、いつも“結果的”に物事が上手く行くだけ。その半分以上は自分が動いているのだと、サマエルはいつか言つて分かせてやろうと思つた。

「サマエル！ほら、行くよ！」

いや、分かせてやらねばなるまいと誓つた。

旅は馴れたものだが、同じ世界に十年もいたことはない。最近、なんとなくスツキリしないのはこの世界に飽きたからなのだろうか。羽竜ハリユウは行けども行けども緑一色の草原にうんざりしていた。大陸へ渡つて来たはいいが、正規ルートではない為、町のあるだろう方角に自信が持てない。

いつそ、炎翼とは言え、ちゃんと飛行能力のある翼があるのだから飛んでやりたいのだが……………

「腹減つたあ……………」

味の濃い肉でも食べたい。そう思うと、冗談抜きで平べつたい石がステーキに見えてくる。

「腹減った……………」

今なら、土下座もしてしまうだろう。

そんな羽竜もまた、ザバスを目指していた。

## 第五章 襲撃

「チヨロいぜ！」

真夜中。得意気に城へ侵入したノアは、意気揚々としていた。

如何に警備を厳重にしようと、ノアは必ず手薄になる箇所を探して忍び込む。なければ工作して作る。それが彼の仕事。泥棒だ。

だが、それは少し前の話。泥棒稼業は引退している。ならば何をしてるのか。

「案外、無防備なんだな」

断じてセキュリティの甘さを指摘して、有能な自分を売り込み仕官を要求しようなどとは思っていない。

ノアの目的は国王の命。そう暗殺だ。

まだ十代前半の少年は、その若さで泥棒稼業をしていたくらいだから、当然、育ちがいいとは言えない。

城の内部を慎重に歩いているが、どういいうわけか外より手薄になっている。

「……………怠慢ってやつだな。自分だけは大丈夫だと思ってる」

国王の部屋の場所は分からないが、大体上に行けばそれらしい部屋に行き着くだろうと思っている。

その考えが正しかったかどうかはさておき、十中八九間違いないだろう部屋の前に着いた。

我ながらスムーズに来れたと感心する。部屋の扉の両脇には、ドラゴンを形どったオブジェ。見張りがいないところを見ると、

今夜はツイてた。騒ぎになれば暗殺は諦めなければならなかったかもしれない。

「大丈夫…やれる」

ノアは、重厚な扉を少し開けて僅かな隙間から顔を入れる。

中は真っ暗だが、よく目を凝らしてベッドの位置を追う。

それと金目の物も。大金にならなくてもいい。売っても怪しまれない物であれば。

暗がりに目が慣れた頃、だだっ広い部屋の一番奥にベッドが見える。その少し手前に暗闇でも光る物が見えた。

「金の燭台か。よし、あれは頂いて行こう」

言っておくが、泥棒は引退している。あくまで手間賃の認識だ。

狙いを定めて部屋に侵入すると、即座にベッドに向かう。

既に短剣は鞘から抜かれ、後は一思いに……

「悪いね。あんたらみたいな存在さえ居なければ、戦争なんて無くなるんだ」

振り上げた短剣に力と祈りを込め一気に降り下ろす。

「えっ!?!」

ところが、強い力がそれを阻止した。

「また会ったな……小僧」

「おま………なんでここに!?!」

ノアの腕を掴んでたのはサマエルだった。

「クク……………さあな」

月明かりに照らされ、暗闇に浮かぶサマエルの顔が不気味に見える。まるで獣だ。

「お前がいるってことは……………」

「

嫌な予感がして、ノアはベッドを見下ろす。すると、いきなり蹴りらしき産物が顔面に入った。

「ぐわあっ!!」

「ざまあみなさい！子供が暗殺だなんて甘いのよ！」

ベッドの上に仁王立ちしてるのは、敢えて紹介はいらないうらろつ……………シズクだ。

「くっ……………性悪女」

「なんですって!?!誰が性悪女よ!!だ・れ・が!」

そしてもう一撃蹴りを腹に見舞った。

やっぱり性悪女だ。ノアは顔を歪めながらシズクを睨み付けた。ただ、たいした威圧感も無いのだが。

「まあいいわ。これで面子は保ったし」

「チキシヨー。まるでオイラがここに来るのを分かってたみたいだな」

段取りが良すぎる気がした。裏切られるような仲間がいるわけでもないし、誰かに話した記憶もない。ノアには、サマエルとシズクが偶然ここに居ただけとしか思えない。

「分かってたのよ！」

ノアの疑念を払ってやるようにシズクが言った。

すると、シズクはなにやら腰の辺りから取り出すと、観念しろと言わんばかりにそれを見せ付けた。

「あっ！！それは！」

それは大まかな世界地図。町や村、城がある場所のおおよその配置  
図。

「なんで性悪女が持ってたんだ！？それはオイラのだ！！」

そう一目で分かるのは、ザバスを丸で囲んであるのが目印だからだ。  
地図は貴重な代物。大まかな物であっても、結構な値段がする。そんな高価な物に行き先を丸で囲むヤツなど、そうはいない。

「あんたがこの前、私から石を盗んだ時に落として行ったのよ。しかも、ご丁寧に行き先を書き込んであるもんだから、助かったわ」

「ついでにこれもな」

シズクの言葉に繋ぐように、サマエルが懐から小さな書物を取り出し、シズクへ投げる。

もちろん、ノアには見覚えがありありだ。

赤い表紙の古びた書物。ノアの日々の記録。つまりは日記だ。

「ここにちゃんと書いてあるわよ。“世界を変える為にザバス国王を暗殺する”って。バカウケしちゃった」

「人の日記を盗み見して、バカにすんのか!？」

「うるさいガキンちょね。泥棒に言われたくないセリフよ」

「ごんの……性悪女め！」

「うるさいって言うてんの！自分の立場わきまえなさい！」

「お前は殺す！おい！青い髪！離せ！この女、絶対許さねー！」

バタバタ暴れだしたノアが厄介になったのが、サマエルはあっさりと解放したが、

「オレはうるさいのが嫌いだ。死にたくなかったら口を閉じる」

ギロリとノアを睨み付けた。

その威圧感と言っただけでなかった。逃げようと思えば逃げる自信はあるのに、遺伝子レベルの本能が、この男には逆らわないほうがいいと言っている。

サマエルとノアではぐり抜けて来た修羅場の数も質も違う。無理もない話だ。

おまけに人相が悪すぎじゃないか？と言いたくなる。シズクはシズクで、尚も勝ち誇ったようにニヤニヤしてやがった。

「くそっ！あと一歩だったのに！」

「なあにがあと一歩なのよ。暗殺で世界が変わるなら、誰だってそうするわよ」

「何もしないよりはマシだ！」

「あんたねえ、いい？王様が殺されれば、代わりに人が王様になるの。その人が殺されたら、また次。考えたら分かりそうなもんだけど？」

なんの不満があって暗殺で世界を変えようと思ったのかは知らないが、所詮は子供の浅知恵だということだろう。

「そんなことより、私から盗んだ石はどこ？出さない」

シズクに言われ、ノアはしかめっ面をしたが、サマエルの冷めた視線に負け、巾着から赤い石を出してシズクに放った。

「うん。間違いないわ。私の石だわ」

艶やかな赤色の石。何度見ても自分の物に違いはなかった。

「けっ。その石がなんだってんだ。見た目は派手なのに、金にはならなかったぞ」

若いとは言え、ノアは泥棒で生活していたのだ、目利きのスキルは

自信もあるし、同業者からも信頼されていた。だから、まさか金にならないとまでは思わなかったのだ。

「そいつはツイてなかったな」

サマエルは座り込んでノアの首根っこを掴み立たせると、

「こっちの用事は済んだ。後はザバスの連中に任せるか」

「ちょ、ちょっと待て！任せるってなんだよ!？」

「決まってるだろう。一国の王の命を狙ったんだ。罪は裁かれなければならぬ」

「マジかよ……………逃がしてくれるんじゃないのかよ!？」

「貴様を逃がせば、オレ達が罪に問われる。貴様を差し出すのは当然じゃないか？ククク」

冗談じゃない。この若さで死にたくなんでない。そう思ってみても、サマエルが立ちほだかる以上、ノアにはどうすることも出来ない。

「さあ歩け」

「オイラどうなるんだ……………?」

「……………死刑だろうな」

簡単に言いやがる。だが、それもやむ無し。失敗することを想定していなかったただけだ。

肩の力が一気に抜けていく。世界を変えようと思った気持ちに偽りはなかった。そりゃあ、浅知恵だと言われればそうかもしれない。それでも、他に方法は思い付かなかった。育ちの悪い自分には、知識も知恵も養ってないのだから。我に返れば、夜更けに何をやってるんだと情けなくなる。認めよう、稚拙な浅知恵だったと。

サマエルに促されるまま歩いて部屋を出ようとした時だった。

「サマエル殿！シズク殿！」

兵士がひとり、慌てながらやって来た。

その様子から、サマエル達の成り行きを見に来たわけではないようだった。作戦を中断させてでもサマエルとシズクを必要としている。それが意味することはただひとつ。

「あ、ちょうど暗殺者を捕まえ……………」

「それどころではありません」

シズクの言葉を遮るように息を荒立て、

「いや、もしかするとその暗殺者と関係が……………子供!？」

ノアを見て驚いてみせた。

「いいから続きを話せ」

サマエルは兵士に言うと、

「あ、はい！実は奇襲が！」

「奇襲？」

「とにかく、陛下が呼びです！直ぐに来て下さい！」  
よほど切迫しているのか、兵士は先に戻ってしまった。

「奇襲って………何かしら？」

シズクは啞然としながら聞いた。

「奇襲は奇襲だろ。バカかお前」

「うるさいっ！」

「イテっ！」

茶化したノアにゲンコツを見舞った。

「ククク。どうやら予言が当たったようだ」

何故か嬉しそうにサマエルは微笑んでいた。

## 第六章 十年の沈黙

「退くなっ！！ここより城に近付けてはならんっ！！」

シグナスの声が夜空に届く。

街に突如として現れた黒い鎧の兵士達。ザバス国を奪うべく、どこかの国が奇襲を掛けて来たのには違いはなかった。

その数たるや、津波の如く。ザバスの兵士も結構な数を誇っているが、比ではない。

「何をしてる！怯むなっ！」

馬上から指揮を取るも、そう上手く動いてはくれない。いつもならこんなことにはならないのだが、奇襲を掛けて来た黒い鎧の兵士達の強さが尋常じゃない。そして数でも圧してくる。持ちこたえてるのが奇跡に近い。

「くそっ！なんなんだコイツら！！」

シグナスが業を煮やすのも無理はない。

他国と何度も戦争をして来たが、全身黒の鎧の兵士は見たことがなかった。

奇襲にはうってつけのスタイルだと感心しながらも、その大半は皮肉だ。

「手こずってるようだな」

そんなシグナスを見兼ね、サマエルが声を掛けた。

「サマエル殿！」

情けなくは思うが、サマエルの顔を見た瞬間、安堵してしまった。

「すごい数じゃない。何よ、アイツら？」

その横で、シズクが顔をちょこんと出した。

「見覚えがあるだろ？」

サマエルがそうシズクに尋ねる。

「見覚え？さあ……………」

頭を捻るが、シズクにはもっぱら記憶にない。

「記憶力の悪い女だ」

「余計なお世話！！分かんないものは分かんないんだから、しょうがないでしょ！いいから、知ってるなら教えなさいよ！」

「……………ジーナスの手下だ」

「あっ！」

「フン、思い出したか」

「そんな……………まさか!？」

「そのまさかだ。あの艶のない黒い鎧……………冒涇の都にいた連中だ。」

ジーナスめ、十年も結界の中に引きこもって何をしてたかと思えば……ぬかりはないってことか。クツクツクツ。とんでもない予言をしたな？」

「茶化するのの後！大体、余裕噛ましてる場合？なんだったってこのタイミングなわけよ？」

二人で盛り上がって来たところだが、

「すまないが、なんの話をしてるんだ？」

シグナスにはなんのことやらだが、どんな重要な話だったとしても、今はこの窮地を脱することが指揮官としての使命。敵がどこの国の兵士かはその後で調べればいい。

「いや、こっちの話だ」

サマエルはニヤリと笑うと、

「久しぶりに暴れてやるか」

愛剣・カオスブレードを抜いた。

「サマエル殿、私も切り込む。ああ、馬は………」

「馬などいらん」

「え？」

そう言うと、韋駄天の如く速さで駆け出した。

その速さにはシグナスも舌を巻いたが、

「シズク殿は下がっておられよ」

とりあえず、驚くのは後回しにして、責務を果たすことを優先させた。

「ジーナス………なんで急に………」

シズクは、十年の沈黙が破られたことを感じていた。

## 第七章 驚異になりうる存在

「へへ、バカめ！」

夜の茂みをなんなくすり抜け、脱走して来たノアは、ザバス城を遠目にほくそ笑んだ。

一時的に牢へ入れられるわけだったのだが、この混乱に乗じてあれやこれやと上手く逃げて来たのだ。

言つまでもなく、街は全面的に戦火だ。ほとんどの兵士が街で奇襲に応戦しているのだから、その反対側を悠々と歩いていればよかった。

「一時はどうなるかと思っただけど、どこぞの国が攻めて来てくれて助かったな」

街から火が上がっている。自分の幸運に感謝しつつも、燃え盛る大きな炎を見て胸を痛めていた。

何故、戦争をするのか？バジリア帝国が世界を管理していた時は、貧富の差に誰もが不満を持っていたらしいが、戦争なんてもので人が死ぬことはなかったと言っ。

その頃は、ノアはまだ五歳程度。後から聞いた話だから、信憑性は正直分らない。

けれども、今の世の中が酷いのは事実。世界の権力者さえ葬ってしまえば、また平和になるんじゃないかと思っていた。

もっとも、シズクとサマエルに言われたことで、そんなことで世界が変わることはないと認識した。

だからと言って、諦めたわけではない。別の方法を探して、また世界に挑めばいい。

そこまでして世界を変えようとするのには、もちろんそれ

なりに理由はある。

「オイラは負けないからな！」

誰に言うでもないが、そう呟いた。

また訪れるだろう時期を待つべく、ザバスを去ろうと思っ  
ていた時、

「おい！お前！」

呼び止められる声があった。

それは、明らかに自分を指した声。ザバスの兵士か、奇襲  
を掛けて来たどこぞの国の兵士か、ノアは息を呑み振り向いた。

「なんだ、ガキか」

その言い草はこの際、無視する。そこにいたのは。マントを羽織っ  
た青年。だが、ただ者ではないことは確かだった。

何故なら、マントからはみ出るくらいの鎧のショルダー、  
足元はもはや隠す意図もないのか、暗がりでも分かるくらい赤光り  
している。

「まあいいや。お前、そつちから来たってことは、この城の人間か  
？」

この非常時に淡々と口を開く青年は、よほどの“場慣れ”した人物  
であると、幼いノアにも想像出来た。

「い、いや、オイラは……………」

野生の勘が働く。関わるなど。

雰囲気と言おうか、やけに威圧的な感覚があり、そう、サマエルのような。それでいて似て非なるもの。

なんにしても、この混乱に乗じて逃げなければ死刑にされてしまう。素早く逃走体勢を取ると、

「待てつての！逃げることねーだろ！」

男に襟首を捕まれ、その機会を失う。

「頼みます！！見逃して！！」

ノアは、形振り構ってられないと土下座までしたのだが、

「あん？俺はただ城への侵入経路を聞いてるだけだぞ。……………ははあん。さてはお前、犯罪者だな？」

ギクリとした。粗暴な言葉使いをするくせに、案外鋭く分析しやがる。

「ま、いいや。ほら、案内しろ」

青年はノアの二の腕を掴み挙げ、強制的に歩かせようとした。

その力足るや、見た目以上のものだった。隙を見て逃げようとも、恐らく失敗するだろう。

この青年が、何を望んで戦禍へ足を向けるのか知らないが、

「マジかよ……………」

ただではすまないような気がしていた。

そして、その予感は当たることが予定されていたなど、この時のノアには分かるはずもなかった。そう、やがて驚異になりうるのだと。

## 第八章 再会の日

「くっ！一体何人いるんだっ！？これじゃキリがないっ！」

サマエルには完全敗北をしたものの、シグナスはそれでもかなりの手練れだ。しかし、そうあっても愚痴を溢さざるを得ない。黒き鎧の戦士達は、倒せども数が減らない。それどころか、数が徐々に増えていくような気がする。

「サマエル殿ッ！」

助言を求めるわけではないが、この異常な事態に頼れるのは自分の部下にはいない。一瞬の判断を誤れない状況を、サマエルなら幾度と潜り抜けて来ただろうと確信があつて尋ねている。

「確かに、ここで応戦していても、いずれこちらの数が減らされる一方だな」

かと言って、敵の指揮官らしき人物の確認が出来ていない。遅かれ早かれ、ザバスが落ちるのは目に見えている。

サマエルがいかに強くとも、一騎当千がまかり通らないのでは意味がない。

「シグナス。ザバス国王を逃がした方が得策かもしれん」

「国を捨てると仰るのか！？」

「兵達ももう持たんだろう。民まで逃がすことを考えれば、ここが潮時だ」

ザバスの人間でもないのに、そこまで考えてくれたのかとシグナスはサマエルに敬意を表したくなる。

ただ、サマエルの言うことは最もであり、国王を逃がし、国民を避難させるなら、これ以上の深追いは厳禁だ。例え不本意であつても。

「サマエル殿、どのくらい持ち堪えられる？」

「これだけの数だ。全て相手には出来ん……が、出来る限りの手は尽くそう」

「すまぬ。危険な真似を、今日出会ったばかりの者に……」

「クツクツクツ。気にするな。これもまた修羅になる為の試練なのだろうからな」

そう言って笑うサマエルの心情が、シグナスには理解出来ないものの、

「かたじけない」

それだけの理由があるのだろうと察することは出来た。互いに、強さへの執念を持ち合わせてるのだから。

「ああ、そつだ。あのじゃじゃ馬はほつといて構わん」

忘れていたかのようにサマエルが言った。

「シズク殿を置いて行けと？」

「クツクツ。要領のいいヤツだからな。そう簡単には死なんさ。実際、もう既に何処かに隠れてるだろう」

自信満々に言うのだから、きつとそうなのだろう。

今はサマエルのシズクに対する信頼を信じるしかない。どうか、二人共死なないでくれと。

「サマエル殿、いつか生きてまた……………」

サマエルは答えなかった。それは死を覚悟したからではなく、再会を約束する理由がないからだだった。

そんなことも知らず、シグナスは近間の部下に声を掛け城へ退却して行った。

「面白いものだ、人間と言う生き物は」

出会って間もない相手でも、同じ時間を過ごすとは必ず再会を願う。

愚かしいとは思うが、不思議と悪い気はしない。いや、むしろシグナス達が無事逃げるまで戦おうと思う。

そして、カー杯にカオスブレードを振り回す。

刃は当たらずとも、風圧で敵を吹き飛ばし、陣形を乱してやる。

人数が多ければ多いほど、陣形の乱れは致命的になる。各々の役割が明確だからだ。

「そつら！命が惜しくないヤツだけ掛かって来いッ！」

どうせ命など大切に思う思考もないのだろうが。

そんなサマエルの期待に応えるべく、黒き鎧の戦士達は一斉にサ

マエルへと襲い掛かる。

小振りの利かないカオスブレードでなんとか応戦する。

何せ、1対数百程度。いかにサマエルが強くとも、手を駒根いてしまふ。おまけに、

「…………やはり数が増えている」

シグナスが国王を連れて逃げるまでギリギリか。国民は無理だろう。残念だが、ザバスは今日で終わりだ。

無関係の人間の為に、こんなことまで引き受けるとは、いつからお人好しになったのかと自分に問う。溜め息を混じりながらも、そんな自分も嫌いじゃないと思える。

無我夢中で剣を振るう中、足元に何かが転がって来た。

「いつてえ……………」

転がって来るやいなやばやいたその“何か”に気を取られていると、黒き鎧の戦士が隙を突いて来た。

「!?!」

しくじったと、サマエルが間に合わないだろう剣にモーションを掛ける。

「どけっ!」

と、後ろから声がして、新たな“何か”が頭上を越え黒き鎧の戦士を倒した。

「お前が戦いの最中に気を取られるなんて……………歳でもとったか？」

そう言った青年は、炎揺らめく深い紅の鎧を纏っていた。

「久しぶりだな、サマエル」

「貴様………羽竜はりゅうか？」

サマエルの知る羽竜は、まだ十代の少年。今、目の前にいる羽竜は二十代くらいだろうか。背も伸び、とても男らしい顔をしている。

「きつとまだ、この世界にいてると思ってたぜ」

羽竜はニンマリ微笑むと、

「これは“貸し”にしとくからな」

そう付け加えた。

「ククク。肉体は成長したようだが、言葉使いまでは成長出来なかったようだな」

それに負けじと、皮肉で返した。

「るせー。ほっとけ」

口を“へ”の字にして、不満気に見せた。

「なんだよ、あんたの知り合いかよ」

すると、サマエルの足元に転がって来たノアが立ち上がった。

「……………貴様もつくづく運に見放されてるらしいな。クックッ。大方、混乱に紛れて逃げようとしたところを、羽竜に捕まったってとこだろう?」

見てたのか? 突っ込んでやろうかと思うほどに的確だった。

「なんだ、お前サマエルの知り合いだったのか」

「別に」

「ふうん……………まあいいや。んなことより、コイツらを片付けるのが先か」

羽竜の登場で警戒してるのか、黒き鎧の戦士達は距離を取っている。

「そういうことだ。コイツらはジーナスの手下だ。人間ではないだろう。遠慮はいらん」

サマエルの心に力強さが湧く。

「遠慮なんかするかよ! 何の為に十年も旅して来たと思ってんだ!」

「フン。安心したぞ。活きの良さは健在で」

「話は後だ! 久々に暴れてやる!」

羽竜は真っ先に飛び出した。

その後をサマエルが追い、

「ちょ………オイラはどうりゃいいんだよ……!」

ノアはひとり残された。

サマエルと羽竜。敵でもなければ味方でもない。ただ、二人共分かっている。この再会が、新しい戦いの始まりなのだ。

## 第九章 強さへく前編

因果なものだと、サマエルは運命を感じていた。

かつては倒すべき敵だった羽竜。それが、十年前も今も、共に戦っている。

「おい！サマエル！聞いてんのか！」

見た目は随分、成長をしているのに、口の悪さは変わっていない。だからこそ、強く因果を感じているのかもしれない。

「聞いている」

「だったら返事しろよな！……………どうするんだ？コイツら、倒せば倒すほど増えてるぞ！」

「……………このまま、くたばるまで戦うつてのはどうだ」

「冗談のつもりかよ。笑えねーな」

サマエルと背中を合わせた。既に黒き鎧の戦士達に囲まれている。

「ククク。まさか、こうしてお前に背中を預ける日が来るとはな」

「昔は“貴様”とか呼んでたな。それは仲間ってことでいいのか？」

「好きに解釈しろ」

サマエルも羽竜も、特に深い会話をせずとも、どう切り抜けるか考

えはまとまっている。

「よう、お前！」

羽竜は足下にいたノアに声をかけると、

「道作ってやるから、俺達に続けよ。本気で走らないと、御陀仏だぜ」

そう言った。

「ちょ……………ちょっと！」

剣を振り抜くモーションを二人が取り、心の準備がと言いたかったが、

「行くぞ！サマエル！」

「言われるまでもない」

どのくらいの時間を稼げるか分からないが、などとは言ってる場合ではない。ノアのことを考えて“やれば”、少なくとも二分は欲しい。そう思い、二人共かなりの広範囲に及ぶ攻撃を放った。

何人いるかも知れない黒き鎧の戦士達は、吹き飛ばされる前に塵になって行く。

「よし！今のうちだ！」

羽竜が叫ぶと、サマエルと同時に走り出す。

慌ててノアも地面を蹴った。

もし置いて行かれたら………後ろは振り向けない。必死に走るだけ。

「ちくしょう！なんでオイラがこんな目に合わなきゃなんないんだ！？」

因果応報と言えはそれまでだが、それにしても酷くないかと愚痴りたくなる。

辺りは火と死体の海。これでは、ザバスは再建出来ないだろう。

戦争を止めたい。ただそれだけの想いで旅して来た。人と人が殺め合う理不尽な行為。その成れの果てがこの有り様なら、もはや戦場ではなく地獄。

ノアは、地獄を走るサマエルと羽竜の背中に光を見る。

あの強さが自分にもあるなら………自分なら変えられる。誰も争わなくて済む世界へ。

力を失っていく足に鞭打つように、大袈裟なくらい大地を蹴る。

理想の強さに手が届くようにと。

それが、ノアの戦いの始まりだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7439x/>

---

ゴッドインメモリーズ2

2011年12月24日23時51分発行